

マルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」利用の現状と課題 —2014年度のアンケート調査をもとに

専修大学文学部
教授 野口 武悟

はじめに

公益財団法人伊藤忠記念財団（以下、伊藤忠記念財団）が、障害があるために紙の本では読むことが困難な子どもたちへの読書支援を目的に、マルチメディアDAISY図書「わいわい文庫」の製作と寄贈を開始してから5年が経過しました。

それを機に、伊藤忠記念財団は「わいわい文庫」寄贈先の意見を把握し、より利用者の実態に合った事業に改善することをねらいとして、アンケート調査を実施しました。本稿では、そのアンケート調査をもとに、「わいわい文庫」利用の現状と課題を整理したいと思います。

2014年度 わいわい文庫アンケート結果

寄贈数898件 回答867件（回収率96.5%）

2015年1月31日現在

（内訳 回答数/寄贈数 : 学校633/655, 図書館153/155, その他81/88）

(1) わいわい文庫（マルチメディアDAISY規格）で有効とお考えの機能は（複数回答可）

回答	学校	図書館	その他	合計
読んでいる場所に色がつく	453	103	57	613
文字サイズの変更	326	88	40	454
音声のスピードの変更	359	86	51	496
文字や背景色の変更	166	62	27	255
見出しから読みたい所への移動	174	56	23	253
繰り返し利用できる	352	48	39	439
操作が簡単	197	40	29	266
iPadなどの端末で利用できる	205	38	37	280
その他	10	3	1	14
合計	2,242	524	304	3,070

(2) 同封しました「わいわい文庫活用術」は、いかがでしたか。

回答	学校	図書館	その他	合計
参考になる	419	103	59	581
少し参考になる	184	29	19	232
あまり参考にならない	6	0	0	6
参考にならない	1	0	0	1
合計	610	132	78	820

(3) 同封しました作品の表紙を集めたポスターは、いかがでしたか。

回答	学校	図書館	その他	合計
活用している	201	15	27	243
活用方法を検討中	342	92	45	479
活用していない・する予定はない	61	28	6	95
合計	604	135	78	817

(4) わいわい文庫は、どのように利用していますか。(複数回答有)

回答	学校	図書館	その他	合計
授業で利用	342	0	12	354
休み時間などで自由利用	164	0	11	175
図書館内での閲覧	118	55	3	176
個人(家庭)への貸出し	51	62	11	124
団体への貸出し	1	22	3	26
活用方法を検討中	172	47	22	241
その他	53	18	33	104
合計	901	204	95	1,200

(5) わいわい文庫は、どこで保管されていますか。(一部複数回答有)

回答	学校	図書館	その他	合計
学校図書館	223	1	1	225
職員室	132	1	24	157
その他の資料庫、収納	42	30	18	90
担当教諭(者)が保管	173	2	7	182
開架書架に保管	23	36	5	64
閉架書架に保管	8	54	4	66
その他	43	25	21	89
合計	644	149	80	873

(6) 活用方法を検討中の方にお尋ねします。その理由を教えてください。(複数回答可)

回答	学校	図書館	その他	合計
利用対象者、希望者がいない	54	18	3	75
利用できる機器がない	36	12	5	53
わいわい文庫や機器の使い方がわからない	15	2	1	18
対応できるスタッフがない	39	9	5	53
その他	87	27	15	129
合計	231	68	29	328

(7) わいわい文庫に収録を希望される本を教えてください。(複数回答可)

回答	学校	図書館	その他	合計
赤ちゃん絵本	116	23	20	159
絵本	431	53	48	532
幼年読み物	259	55	28	342
中高生向け(YA)	61	58	3	122
詩集	147	20	10	177
だれでも利用できる作品(Ver.BLUE)	196	74	32	302
その他	58	8	11	77
合計	1,268	291	152	1,711

(8) ご感想・ご意見等を自由にお書きください。

複数の寄贈先から寄せられた類似する意見・感想としては次のようなものがありました。

「読みが困難であったり、集中力に欠ける子たちには、有効な図書」(18件)

「選書内容が多様で、多年齢に対応できる」(15件)

「タイトル数や分野を増やして欲しい」(13件)

「操作が簡単でとても使いやすい」(12件)

「活用術の冊子が参考になった」(10件)

「書影のポスターがわかりやすく、周知に広がった」(8件)

「iPadに入れて携帯できるので、利用しやすい」「弱視の児童生徒に特に活用できる図書である」(5件) などでした。

(9) 次年度以降の「わいわい文庫」の寄贈は

送付希望	821	不要	46	未回答(送付停止)	31
------	-----	----	----	-----------	----

不要の理由としては、

学校では「学習活動において、活用する機会があまりない」「本校の実態に合わない(軽度の知的障がいの高校生のための支援学校)」「図書館(図書室)が学級数増のため教室として転用されており、保管と活用が困難である」「管理するスタッフがいない」などです。

公共図書館では「主に成人の視覚障害者をサービス対象としているため、活用の場がない」「県内には点字図書館もあり、県立図書館では現在DAISY関係の資料受入は行っていない」などでした。

課題：

アンケート調査の考察から

以上の現状から見えてくる「わいわい文庫」利用の課題として、次の3点を指摘したいと思います。

(a) よりやさしく使える工夫を

「わいわい文庫」の機能のうち、多くが有効と回答しているのは、マルチメディアDAISY規格の特長である「読んでいる場所に色がつく」でした。他にも「音声のスピードの変更」、「文字サイズの変更」、「繰り返し利用できる」など、電子図書ならではのアクセシビリティの機能が上位を占めています。言い換えれば、利用者の多くがマルチメディアDAISY図書の有効性を実感しているといえます。

一方で、「操作が簡単」については予想していたほど有効との回答が多くありませんでした。「わいわい文庫」は、CDをパソコンに挿入するだけで自動再生するように加工されていますので、従来のマルチメディアDAISY図書よりも「操作が簡単」になっています。しかし、年少者や知的障害者などが一人で利用する場面を想定すると、さらなるアクセシビリティとユーザビリティの向上が必要であると考えます。

また、「CDからiPadに作品を転送する方法が難しい」という意見をよく耳にします。本誌にはその方法も載って

いますが、ICTに慣れていない人にはハードルが高いようです。タブレット端末での利用が今後さらに増えることが予想されますので、CDでの寄贈に加えてデータ配信などの形式を導入するのも有効でしょう。

(b) バリエーション豊かな作品提供を

「わいわい文庫」は、学校では「授業で利用」（言い換えれば、教材としての利用）が多く、公共図書館では「個人（家庭）への貸出し」や「図書館内での閲覧」が多くなっています。

こうした利用実態が、「わいわい文庫」に収録を希望する作品ジャンルにも反映していると思われます。特に公共図書館からは、誰でも使える作品「Ver.BLUE」へのリクエストが最も多くありました。また、自由記述にも、「タイトル数や分野を増やしてほしい」という声が複数寄せられています。作品数の増加と幅広いジャンルの収録は、利用者のニーズに応えていくためには避けて通れない課題です。

(c) 寄贈先への働きかけ

「わいわい文庫活用術」については、多くの寄贈先で参考にされていることが分かりました。

一方で、表紙のポスターについては「活用方法を検討中」が半数以上にのぼっています。

「わいわい文庫」の利用促進の足がかりとしては、「わいわい文庫」自体が利用者の目に触れる機会を増やすことが大切です。ポスターの有効活用とともに、「わいわい文庫」を人の出入りが多い、学校図書館など開かれた場所で、組織的に保管することが大切です。

学校で担当教諭が個人的に「わいわい文庫」を保管する場合、異動になった際に引き継がれずにCDが所在不明となってしまう恐れもあります。また、公共図書館の多くが、閉架式書庫など閉じた環境で保管されています。

「わいわい文庫」の作品の多くが、著作権法第37条第3項の規定によって利用対象者が限定されていますが、誰もが利用可能な「Ver.BLUE」をすべての図書館が開架書架に置くことだけでも、効果が見込まれます。

保管場所やポスター活用の方法を事例も交えながら「わいわい文庫活用術」や伊藤忠記念財団のウェブページなどで紹介してはいかがでしょうか。

おわりに

筆者が特別支援学校の校内研修などでマルチメディアDAISY図書について紹介すると、「知っています」という教職員が年々増えてきているように感じます。しかし、よくよく聞いてみる

と、知っているのは名前だけで、実物は見たことがないという人がまだ多いようです。これからも、認知度向上に向けての取り組みが欠かせないでしょう。この年末年始に『朝日新聞』『読売新聞』（ともに朝刊 都民版）に伊藤忠記念財団の電子図書事業に関する記事が掲載されていましたが、多くの人が目にするマスメディアを活用しての広報は認知度向上にとって効果的な手段の一つだと思います。

日本人の約1割が読書に何らかの困難を抱えていると考えられています。マルチメディアDAISY図書は、こうした人々に読書の楽しさ、読書できる喜びを届けることができる最適な媒体といえます。こうした人々の割合は増える傾向にありますし、国公立の学校や図書館では、2016年4月から「合理的配慮」の提供が義務化されます（「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の施行による）。マルチメディアDAISY図書はまさに「合理的配慮」の一つであり、伊藤忠記念財団の「わいわい文庫」の取り組みのもつ社会的意義は、ますます大きなものとなっていくことでしょう。

今後の「わいわい文庫」の取り組みに期待するとともに、筆者も一研究者として微力ながら応援したいと思います。